不登校からの回復過程
－女子高生事例による検討－

山　本　　奨*
（2013年３月１日受理）

Susumu YAMAMOTO

A Study of Recovery Process of School Non-Attendance
- A Female High School Student Case -

Ⅰ　問題と目的

不登校児童生徒が，その状態を変化させ回復に至る過程には，一定のパターンがあると言われる（佐藤，2005；小野，2003など）。山本（2008）はこれら提案を圧縮し，(i) 混乱や身体症状等が見られる不安定な段階．(ii)落ち着きを取り戻し，あるいは意欲を失ったように動きが見られなくなる段階．(iii) 勉強や学校に興味を示し外出の機会が多くなり，登校を試みこれを重ねて安定して登校できるようになる段階，の３段階に整理している。そこでは不登校児童生徒の内的取り組みが時間的展望の変化を通して検討され，①否定的な現在指向，②後悔など否定的な過去指向，③過去を受容しようとする肯定的な過去指向，④不安を扱い得ない否定的な未来指向，⑤肯定的な未来指向や現在指向が回復される各段階を遷移する過程が示されている。またその変化の契機として，課題への直面，保護者からの被援助間の獲得が指摘されている。しかし，時間的展望は不登校児童生徒の状態を理解しようとする介入者には有益な観点と言えるが，児童生徒自身によって，必ずしも意識化されるわけではない。また，不登校の回復過程の中で，介入者側が最も困難を感じるのは，再登校を促す時機に関する情報だとの指摘がある（山本，2010）。

そこで本研究では，不登校児童生徒の再登校に向けた内的取組について，保護者との関係と課題への直面及び再登校への行動化が可能となる時機に注目しながら，事例を基に論ずることを目的とする。

Ⅱ　事例の提示

１　事例の概要と来談経緯

本事例は，不登校を主訴とする15歳の高校１年生女子との，Ｘ年11月から翌年５月までの７か月間の，プライバシーが完全に守られる学校内の個室での面接過程である。以下では，「　」はクライエント（以下，Cl）の言葉を表し，＜ ＞は報告者（Th）の言葉を表す。なお，Cl らは学術目的での事例の公開に同意されたが，本報告では本質を損ねない範囲で一部を改変する。

登校できない状態は，当該の援助を始める５か月前，高校に入学後のＸ年６月中旬に始まった。初めの２週間，２～３日の欠席が繰り返され早退も目立つようになり，その後，１学期の終業式まで連続して欠席することとなった。夏休み中に２

＊岩手大学教育学部

日間ある登校日のうち，１日は欠席，もう１日は遅刻して登校した。２学期の初めは，遅刻して登校し直ぐに早退する日が１週間続き，再び連続して欠席することとなった。

登校できない理由について，担任教師によって確かめることが試みられたが，Clによっては全く語られなかった。また，母親も心当たりがないと言い，小・中学校時代にはこのように欠席することはなかったと説明した。Clに身体症状はなく，認識されている発達上の課題はなかった。

来談はClの自発的なものではなかった。担任教師が教育相談担当者と管理職と相談の上，報告者に紹介されたものである。初回日程の連絡は担任教師によって行われたが，最初の予約は「一人では行けない」との理由でキャンセルされた。その後，母親と一緒に来談することが担任教師により提案され，初回の面接が設けられた。Clの家族は母親と小学校高学年の弟とCl自身の３人という構成であった。

２　面接過程

19回の面接過程について，Clの状態を参考に３期に分けて報告する。

第１期（第１回から第10回：Ｘ年11月～Ｘ＋１年２月）

［＃１］約束の時間に20分遅刻して，母親と一緒にタクシーで来談した。母親が，都合のいいバスがなくて遅れたと説明した。母親は，用事があるので面接の終わり頃に迎えに来ると言い残し校外に出た。Clは小さな声で話し，口数は少なかった。しかし拒否的な態度ではなかった。

Cl「毎日，推理小説を読んで過ごしている。この頃は一日二日で１冊。たいがいはお母さんの読んだものを借りる」と日常を語る。「この頃，お母さんとの話すことは，お母さんの仕事のこと。車で商品を配達する仕事を自営でやっている。お母さんはとても忙しいから，休みがあると本当によかったと思う」と母を気遣う。外出した母を庇うような話しぶりである。そして校則を意識して少しためらいながら「私も２か月前から，アルバイトをしている。夜の７時から10時までの調理の仕事」と話す。そして家計を助けたいと言う。

今日の感想を確認しながら，Thから週１回，50分の面接を行うことを提案すると，Clはこれに同意し，目標については『登校できるようになること』と設定した。次回の予約を調整する中で，「その日は弟の学校が休みだから‥」，「月曜日はお母さんの仕事が忙しいからだめ」と家族に気を遣う様子が見られた。ThはClを迎えに来た母親とも面接の枠組みを確認した。

［＃２］母親はClを連れて来ると今回も外出した。母親から借りた五千円の交通費が話題となった。いつものアルバイト先の店舗とは違う研修施設への交通費の入金が遅れていると言う。アルバイト先からの入金を待って返そうと思ったが，その入金も遅れた。担当者に話したがはっきりしなくて，先月は言いそびれ，今月は担当者と確認したが，実際は入金されていなかったと言う。そして「お母さんから，しつこく言われたので返した」と言う。Clが「アルバイト先には不満をぶつけたりはしない」と言うので，＜言うのが不安なの？＞と聞くと「そう。楽に話せない」と話す。そして＜お母さんもしつこいのかな？＞と確認すると，しばらく黙った後，「でもお母さんに悪いから」と語る。

［＃３］「この２週間は忙しかった」とアルバイトの話。新しいメニューが加わりクリスマスにさらに新たなメニューが加わる。自分の役割を話し「人のペースで仕事をしなければならないオーダー対応は大変だが，翌日の仕込みをしている時は自分のペースでできる。そんな時はホッとする。それが自分でよく分かる」と言う。そして「悪いことの時も自分でそんなふうに感じているのがよく分かる」と語る。

そして今回もClは交通費の未払いについて取り上げた。「支払ってくれるか信用しているわけではない」と言い，「それでも腹が立ったりはしない」と話す。前回は「思っても言わない」と言っていたが，今回は「腹が立たない」と言っているように聞こえたので，Thがそれを指摘すると，

「不満などない」と答える。

Clにはイラストを描く趣味がある。その時間が増えて，同じ楽しみを持つ人のためのイベントに出かけるようになったと語る。そして新しい友人が増え始めたと言う。

［# 4］1週間前から眠れなくなったと言う。「やらなければならないことがあって，焦っている」と話す。趣味の話だ。

イラストのイベントに行って来た。弟は人混みを嫌がるが，母親が連れて行けとうるさいので，一緒に行くのだと言う。そのイベントを「すごく楽しい時間」と話し，次回は自分の作品を売るのだと言う。そして，「その準備が忙しくて焦る」と語る。主催者との交渉や費用のこと，印刷会社との連絡など実務的なことがたくさんある。Clは「今は，楽しみより焦りの方が大きい。それでも全体としてはうまくいっている」と整理した。しかしその一方，その楽しさも焦りも母親に話したいとは思わないと言う。

［# 5］Clは「年末年始いろいろなことがあったが，あまり年が明けたと言う気がしない」と言いながら，母親の仕事の手伝いをしたことやアルバイトがとても忙しかったことなどを話す。イラストの入った自身の作品は一昨日にできあがり，「ホッとした」と言う。同時に，印刷会社に原画を送った時は，「無事に届くか心配だった」とも強迫的な傾向を示した。Thが＜じゃあ，少し不安や忙しさを感じたけれど，全体としては順調と言う感じ？＞と問うと，Clは少し考えてから「はい」と答える。＜今まで，学校に通っていた時とは違う年末年始だったんだよね？＞，「はい」，＜『順調？』って聞かれた時，学校のことを考えなかったの？＞，Clは顔を紅潮させて「ちょっとは」と答えて，「最近は学校のことをあまり考えなくなった」と言う。＜朝起きた時とかも？＞，「最近はあまり」，と。

そしてClは，「アルバイトの交通費が出てホッとした」と言う。不満などの感情を否定しながら，「聞くと相手が困るだろうと思うと聞けない。もう聞かなくていいかと思うとホッとした」と話す。

次回の予約について，母親が『いいのね？』とClに確認している。次回は仕事の都合で母親は来られない。次回は一人で来談することになる。

［# 6］30分の遅刻をして初めて一人で来談した。遅刻の理由はバスが来なかったためと言う。一人で来談することについては「特に大変でなかった」と言い「馴れて来たから」，次回も「一人で来られるかも知れない」と話す。

「この連休はとても忙しかった」と振り返る。アルバイトやイラストのイベントや捜し物。捜し物が見つかるまでの不安とその後の安堵を語る。イベント会場への道順も「とても心配だった」と言い，これについても「着くことができて，ホッとした」と言う。「忙しかったが充実していた」，そして「今夜のバイトが終わると明日明後日は休み。それが楽しみ」と話すので，＜週の中にそれなりのリズムがあるって感じだね＞と返した。

今日は遅刻のために面接が20分しかない。＜もし良ければこのまま時間を延長してもいいけれど‥？＞と聞くと，Clは相当時間，無言で考えている様子。Thには時間通りに終わりたいと思いながら言えずにいるように見えたので，＜今，君がどんなふうに考えていたのかを，取り上げたいんだけど＞と沈黙に割り込んだ。「もし続けるんならそれでもいいけど，終わりたいとも思っていた」と答える。＜どうして『終わりたい』って言えなかったんだろう？＞と問うがClは無言であったので，＜言ったらどんなふうになると思った？＞と続けた。すると「もう少し後で，そう言えたと思う」と。＜僕が，少し早く進め過ぎた感じ？＞と聞くと「たぶん」と答える。Thがそのことを詫びると，驚いた様子。＜でも，今みたいに，君が返事をする前に，周りが勝手に先に進んでしまうことって，ここ以外でも多いのかもね＞と聞くと，Clは「そう思う」と頷いた。

［# 7］イラストの趣味は充実し，交流も増えたことが語られた。アルバイトに出かける時，「日曜とか長い休みの後は，面倒でぎりぎりまでぐずぐずしたりする」が，休んだことはないと言うので，＜じゃあ，学校に来ていた頃は？＞と問うと，

しばらく考えて「わからない」と答えて口が重くなった。「やだなあ」が比較的近い表現かも知れないと言いながら，学校を休み始めた時の気持ちも，休みが増えていった時の気持ちもうまく思い出せないと言う。「やだなあ」の対象も不明瞭なままであった。具体的に嫌な人や出来事，きっかけなどはなかったと言う。その「やだなあ」の感じは高校生になってからのことで，小・中学生の頃はなかったと言う。＜できることなら，登校したいって気持ちはあるのかな？＞と問うと，これにも「わからない」と答えた。＜学校の話しになってから『わからない』という言葉が多くなった＞と指摘すると，「そう思う」と同意する。「一人で学校のことを考えるのは嫌」だと言うので，＜ここで二人で考えて行きましょう＞と支持すると大きく頷いた。

［# 8］表情が表れることが多くなった。よく笑顔を見せる。Clはアルバイトのない夕方，本当は仕事の日だったのではないかと不安になることを訴えた。間違いないと分かっていても落ち着かない。また，やり始めたことを途中で切り上げられないと言う。読書も趣味も部屋の掃除も捜し物も同じである。Thには，Clが課題をそのまま自分の中に納めておけない状態にあるように思われた。＜もし，そんな君に，直には解決つかないようなことが起こったら，どうなるんだろう？＞と問うと「できる限り先に伸ばすと思う」と言う。＜直に解決してしまうか，遥か先まで先送りしておくか，どちらか？＞，「そんな先じゃないと思う」，＜実際に許されるぐらいだけ先送りするってこと？＞，「そう」と。＜お母さんから交通費の返済を求められた時も，まず先送りして，何度も求められると自分で立て替えて解決したのと似ているね＞との指摘に「すごく納得できる」と笑顔で答える。＜今，先送りしていることはないの？＞の問いに，Clは長い間沈黙し，下を向き探る様子をみせたが，「ないと思う」と答える。Clは学校のことに触れなかった。

「バイトに出かける時で，弟一人になってしまう時は心配。食べ物の場所とか，温め方とか。自分がそばにいてあげたら，心配にはならない」と言う。

［# 9］イラストのイベントに出す作品がこれまでより大掛かりだ，と勢いよく話し始めた。「今は，期限までにできるかどうか心配で」と言うClは実際には，課題を整理し曜日毎にスケジュールを決めている。母親の仕事の都合で準備ができない日があることを話しながら，期限までに「できるだろうとは思うけれど，それでもできないような気がする」と。それは，漠然とした不安ではなく，具体的な心配だと言う。＜なんだか順調に準備が進んでいる気がするけれど？＞と聞くと，Clは「はい」の「は」まで言い掛けた口の形で，しばらく考えてしまった。＜心配がはっきりと感じられたの？＞と聞くと，Clは笑顔で大きく頷いた。「準備をしている時，予定通り進まないで遅れてしまうと，すごく焦るし，逆に早く終わってしまうと拍子抜けしてしまう。すんなりと終わってしまうと，何かを間違ってしまっているのではないかと，不安になる」と言う。

この日，一年前のケガをした時の医師の誤診に対する不満が語られた。この時のClは憤慨に充ち語気は荒かった。Thがその語気を指摘すると怒りを納め「でも，最初に診てくれた人（医師）と２日目の人は違ったし‥」と，対象である医師を庇うように言い直し，さらに「母親が怒っていた」と自分の怒りを否定した。その後，Clは「初めはケガの状態がショックだったが，だんだん医者に対する不満が湧いて来たみたい。でも不満は言えなかった」と自分の思いを整理した。次回の確認をした時，「次はお母さんは来られない」との言い方に不満が込められているようにThに感じられた。その直後，Clは「仕事が大変だから‥」とつけ加えた。

［#10］Clは慎重に考えて話し始めた。「上手く行きました」と前回のイラストの作品のことを話した。「ただ次は規模が大きいので心配」と喜びや満足よりも，次の心配に話が移った。前回のイベントからの帰りの電車の中で，次の事を考えていたと言う。その日はそのままアルバイトに行き，

帰宅すると直ぐにやるべき課題を紙に書き出し，その予定表を部屋に貼り，次回のイベントの申込書を送付したと言う。＜自分から課題を作り出して，強引な計画を立て，自分に厳しくしているように見える＞と指摘した。Clは「今，本棚を移動しようと思っているけれど，雑誌の整理もしなくてはならない。いつまでにどの棚の雑誌を整理するかを，予め考えてきちんと決めている」と言う。＜そんな君が，もし計画を立てなかったらどうなるの？＞と問うと,「やらなきゃ, やらなきゃ, って思いながら，それでも，ずっと動けないでいる。そんな状態が嫌」と言う。

＜これまでに，そんなやり方が通用しない大きな問題を経験したことはないの？＞と問うと，しばらく考えた後で「あったかもしれないけれど，思い出せない」と曖昧に答える。Thには，Clが登校の問題を頭に浮かべたように思えたので，＜学校に来られなくなった時，どんな計画を立ててみたの？＞と聞くと,「立てられなかった」と答える。そして,「計画を立てなければならないような，具体的な問題はなかったと思う」と言う。

第２期（第11回から第15回：Ｘ＋１年２月～Ｘ＋１年３月）

［#11］イラストのイベントに関する心配が小さくなった。仲間もできた。前回まで，手探りでやっていたことも,「終わってしまえば心配したほどではなく，たいしたことはない気がして来た。安心している」と笑顔で語る。そして，今回は，まだ予定表を部屋に貼っていないと言う。今は，スケジュールを考えるのが楽しいのだと言う。

習い事に自転車で行くことを，母親が帰りの夜道を心配して反対する。母親が送ってくれる時しか行けないのだと言う。＜お母さんの文句を聞きたくない？それともお母さんを心配させたくない？＞と問うと,「ぐちぐち言われるのが嫌だから」と答える。面倒になりそうな時は,「一応，聞いておく。他の人との関係なら，嫌なものは断ったりできるけれど，後のことを考えると母親との関係では，このようになってしまう」と言う。

「夜，仕事で母親が居ない時があって好きなことができる」と言う。母親は夜になると翌日の仕事の準備をする。この作業を始めると部屋には居られない。「ぐちぐちと言われるのが嫌だから」,「お母さんが居ない夜はすっきりするって感じ」と。＜お母さんのことを気遣うことも多かったみたいだけど？君にとってお母さんって‥＞と問うとClは長時間考えて紅潮した。長い沈黙のあと「わからない」と。＜秋から面接を始めて，今みたいに，考え込んだのは，学校のこととお母さんのことの二つのように思えるけど？＞,「そう思う」と。

［#12］イベントの準備で軽いトラブルがあり「がっかりした」と言う。その重苦しい気持ちを家族に話したか問うと，母親も弟も頼りにしていないと話す。Thは母親に対する気持ちを取り上げたが，Clは珍しく考えるのを避けた。そして，今日は母親と来談したが,「学校に着くなりお母さんは本を読みだして何も話していない」とも言う。

話題が変わると，Clの話し振りはいつも通りに戻った。アルバイトがない日の「あの『休んでいていいのかな』っていう感じがわいて来て，それは始まる頃の時間に大きくなって，終わる時間になると安らぐ」と言う。

［#13］「先週忙しい母親に代わって弟の授業参観に行って来た。母親のためというより弟のためだった」,「弟の順番が来た時とても心配ではらはらした。もっと上手くできるはずなのにと思うし，弟にもそのように注文した」とまるで母親のようなことを言う。

Clのアルバイト先には同じように学校を休んでいる同級生がいる。その生徒がClに『学校どうするの？』と聞いて来たと言う。「考えなくっちゃって思って」と言うClに＜今までは，学校のことは『よくわからない』と言って，棚上げにして来たみたいだけれど？＞と聞くと「はい」と答える。＜君は，何かをする時，自分で締切を決めたりしてスケジュールを作るんだよね。学校のことはスケジュールに載せたの？＞の問いにも「はい」とはっきりと答える。「まだ，どんなふ

うに考えていくかは，はっきりと決めたわけではないけれど，春休みに入る前には，決めようと‥」と語る。

Clはイラストのイベントの準備で忙しいと言う。忙しいと言いながらそんなに嫌な様子はない。「忙しさを楽しめるようになった。スケジュールを立てているから安心できる。終わればホッとできるし」と言う。ただ，次回はそこに母親の仕事仲間の子どもを連れていかなければならないのだと言う。母親にはかなりなげやりに「わかったわよ」と語気を荒げたと言う。それとは反対に，最近久しぶりに会った祖父とたくさんの話ができたことがうれしかったと言う。

［#14］ 最近は一人で来るのも普通のこととなった。「イベントの疲れが残っている感じがして」と言う。＜いつもなら，もう次のことを考えて，準備を始めているはずなのに？＞の問いに，「いつもと違う」と言葉を探すように考えて，「のんびりって感じ」。Clはこの自分の言葉が気に入った様子でうれしそうに笑った。「まあまあ，上手くいったという感じを楽しんでいる」と言う。この感じを夕方，つまり以前ならアルバイトがないことを強迫的に不安に思うような時間から感じていると言う。そして次の課題も，「その時がくれば自然に取り組めるような気がして，無理をしていない」と言い，学校のことも「学期中に考えようかと思っている」と話す。それは「『ああ，考えなくっちゃ』って，自然に浮かんで来て」と言う。具体的なことではなく「学校どうしよう‥みたいな。長い間，そのことを考えるんだけれど‥」と漠然とした不安を語る。

Clは進級が認められなかった。原級留置や転学・退学など今後の対処について担任教師はClに説明をした。それについてClは「たくさんの方法があったんだなあって」と，これまで問題を先送りして来たことの後悔を語った。

［#15］ ３月末にもイベントがあり，そのための準備が忙しいと言う。楽しいし，以前のように心配や不安はない。「余裕がないという感じ」だと言う。その中，別の参加者からの作品が送られて来てことを，「いい本だなって素直に思った」と言う。「自分も頑張らなければならないというプレッシャーみたいなものは全然感じなかった」と楽しそうに話した。

これとは反対に，学校のことについて話す時のClは，やや落ち込みが見られた。Clは担任教師から決断を促されているが，「まだ，どうするか（担任教師に）伝えていない」と言う。考え過ぎて疲れているように見えた。それでも，次回の面接が４月になることを確認しながら，Clは「それでいい」頷き予約を入れた。そして，この面接に来る時の気持ちが語られた。「初めの頃は週末から気になり始めて『行かなきゃ』って感じだったけれど，この頃は『ああ，あるな』って感じ」だと言う。

第３期（第16回から第19回：Ｘ＋１年４月～Ｘ＋１年５月）

［#16］ ４月に入ったがまだ入学式・始業式前である。Clを外来受付に迎えに行くと，いつもなら靴を履いたまま立って待っているところであるが，既に靴を脱ぎ，一人で廊下を歩いて来る。Clは「疲れているんです」ときりだした。イベントは心地よい疲れでもあり，人に酔ったとも語る。Clはこの半年を自ら振り返った。

Clは先日，「みんなのために料理をした」と言う。母親の仕事仲間の子どもを預かることになった日にカレーを作ったのだと言う。「みんな『美味しい』って言ってくれたんだけど‥」，＜けど？＞，「自分でもそこそこ上手くできたと思ったんだけれど‥」，＜けど？＞，「けど，‥本当にそう思っているのかどうか‥」，＜それは誰が？＞，「お母さん」，＜どんなところがそんなふうに？＞，「なんか言い方に棘があるような気がして‥」，＜それは事実？それとも君の受け取り方の問題だと思うの？＞，「‥私かもしれない‥あの，私，いろんな具を入れて煮る時，お母さんが『もう煮えた』って言っても‥，自分でも確かめるんだけれど，自信がなくて煮ちゃうんですね。‥で，結局，煮過ぎてしまって‥お母さんも言おうと思って言った訳ではなくて，独り言たったんだけ

ど，出したカレーを見て，『ああ，やっぱり』って」と。そして「自分では，そんな自分でいいと思っているけれど，そのことを母親がどう思っているかがすごく気になる」と語る。そして，そんなことが日常の様々な場面で生じていることが話された。

「お母さんが，本当は何を思っているのかわからなくて，なんだか‥」，＜落ち着かない関係ってこと？＞，「そう」と。そして以前の面接で，母親の話しになった時，Clが『わからない』と答えていたことを確認した上で，＜いつ頃からそんな関係になったの？＞と問うと，「お母さんが，前はお店で販売をしていたんだけれど，訪問して注文を取るように変わって，お客さんも増えて飲み屋さんみたいなところにも売るようになったんですね。それで夜にお母さんが居ないことが多くなって‥，その頃から‥」と。それが一年前のことだと言う。Thが＜『いつから』と聞かれて，具体的な月日でもなく，Cl自身の区切りでもなく，お母さんの仕事のことで答えたのには，何か意味がある気がするけれど＞と問うと，「そんな感じがする」と答えた。「すごくお母さんと話すことが少なくなってしまって‥」，＜でも，お母さんが働かなければならないことは，よく分かっている＞，「そう」と。そして以前から，Clが母の多忙を気遣うような発言がみられたことに触れ，元のように安心できる状態に戻りたいかと問うと，しばらく間があって「はい」と。＜今，何を考えていたの？＞，「このままでもいいかもしれないし，どうかな，って思って」と語る。

先日の夜，母親の仕事の準備を手伝ったと言う。「納期が迫っていたので『手伝いたい』って思った」と。Thは以前は母親を避けていた状況だと指摘すると，「ドラマを見ながらお互いに黙々と仕事をしたが，別に居心地は悪くなかった」と話す。

次回の予約日は新年度の始業式後になる。Clはこの学校で一年生をやり直すこととなった。この面接について，Clは「まだ終わっていないと思う」と明確な表現で継続を希望した。

［#17］「毎日がバタバタしている。なんだか落ち着かない」という表現で生活の変化を説明した。それでも登校していることを，あまり特別なことが始まったようには思っていないと言う。「ああ，（学校に）来ることができたなあって感じで」，「（学校のことについて）そんなに考えることもないのかなあって思える」と今の感じを説明した。「入学式には出ないで，その後のホームルームから教室に入って‥（しばらく考えて）ちょっと緊張したけれど，まあ，こんなものかなって‥」と。

この日，Clは父母の離婚について，初めて語った。Clが中学３年生の時の夏に別居を始めて秋には離婚した。Clは「理由を話してもらったことはない。ただ『別れることになった』って‥それだけで‥」と言う。

Clは母親が「心配してくれていた」とこの一年間のことを振り返った。母親には「いろいろ言われてしまうが，登校できないことについては，気を遣ってくれていたのが分かる」と。『そんなに焦らなくても，時間が必要なこともある』，『少しぐらい余分に時間がかかってもたいしたことじゃない』などと励まされていたことを話した。

［#18］普通に登校できているとClは話し，「よく眠れる」と言う。Clは新入生歓迎会の日を欠席した外は，学校を休んでいなかった。

「この頃，部屋が汚くて，掃除をしたいけれど‥」と言う。これまでは几帳面に片づけをしていたが，この頃では掃除をする時間がないと言う。「毎日がどんどん過ぎていく感じで，時間が足りない。なんか物足りないって感じもある」と話す。新しく始まった学校生活は「良くも悪くもない」と言いながら，学校での日常的な出来事を話した。

［#19］「今日はバイトをはずせなくて‥」とキャンセルとなった次の回である。新学期が始まってから５月半ばまでの出席状況は，欠席２日，早退２回であった。

「お父さんのところに行って来た」と５月初めの連休の話をした。弟と二人で泊まって来た。前々回に離婚のことが取り上げられたが，具体的に父親の話が語られたは初めてのことである。電車で

１時間ほどの町に父親は住んでいる。高校に入学してからのこの一年は会っていなかった。「『いつでも来ていい』って言われていたことを思い出して‥本当はそれを忘れていたわけではなくて‥，なかなか機会がなくて‥」と言う。そして「お母さんも『行って来ればいい』って言ってくれて‥」と母親の同意に励まされたことを話した。父親の実家は久しぶりだったので，駅を降りてから道に迷ったが，弟が家を探し出してくれたのだと言う。父親と久しぶりに過ごしたことについて，少し考えて「ふつうに‥」と答え，「お父さんが今度も『いつでも来ていい』って言ってくれた」と話す。

面接を終結とすることが取り上げられ，＜いつでも予約を取りに来ていいから＞と確認すると，「それなら次回は予約しないでも‥」と言う。終結とした。

［事後］ １学期の欠席は合計４日であった。遅刻や早退も数回であった。１学期末にClを呼ぶと「大丈夫みたいです」と言う。その後２学期の初めには，Clは自らThを訪ねて来た。「（学校に）来ていることを‥」という表現で，登校できていることを伝えてくれた。その後，Clは順調に進級し卒業することができた。

Ⅲ　考察

１　本事例の変化の過程の一般性

まず，本事例の変化の過程が不登校事例として一般的なものと言えるか検討する。山本（2008）が整理する，(i) 登校できないことが頻回になり，周囲は原因を探し解決を試みるが再登校は容易でなく，混乱や身体症状等が見られる不安定な段階．(ii) 本人及び周囲が再登校の試みを中断することで家庭内や自室では落ち着きを取り戻し，あるいは意欲を失ったように動きが見られなくなる段階．(iii) 勉強や学校に興味を示し外出の機会が多くなり，登校を試みこれを重ねて安定して登校できるようになる段階，のそれぞれに照らすと，本事例は落ち着いた日常を過ごしていることやアルバイトや趣味などにより外出の機会を増やしていることから（ii）の後半から（iii）の初期に面接が開始されたものと考えられた。

また，小野（2003）による，不登校の初期段階として罪悪感や身体症状を特徴とするⅠ苦悶期，親の愛情を確認し原因を探し無気力の状態となるⅡ休息期，行動が拡大し友人関係が回復するⅢ始動期，学習に関心を示すⅣ帰心期，登校を想定するⅤ準備期，登校を試みるⅥ挑戦期，Ⅶ不安定登校期，Ⅷ安定登校期，の８段階に照らすと，母親との関係をテーマとしていることなどから，休息期から開始されたものと考えられた。その後は外出や交友の増加，登校の試みや若干の欠席など，概ねこれに沿った回復過程を経ているものと考えられた。以上により，本事例のClの回復過程の一般性は確認されたと言えよう。

２　両親を中心とする対人様式

第１期当初，母親と一緒でなければ来談できないなど，Clは母親に依存する姿勢が見られ，同時に母親の多忙を気遣う態度が見られた。交通費の返済や弟の世話などの母親からの要求には，納得していなくてもそれを断ることも感情的になることもなく，受け容れる努力をしている。母親の都合で趣味に関する作業が進められないことも，それを受け容れる姿勢を見せる。また，この時期をとおして次第に一人で来談できるようになり，母親との関係を再検討する取組も徐々に始められたと考えられた。

第２期になると，母親への態度に変化が見られるようになった。母親の文句を避ける様式は従前通りであるが，それを避けようとする意図を明確に表現するようになり，頼りにしていないと明言する。母親の求めに「わかったわよ」と乱暴に答えるなど，不快を表現する傾向が見られるようになったと言える。

その関係を整理することとなったのは#16の調理への評価である。母親が何を考えているのか理解できなくなっていることを自覚するようになった。それは離婚後必要に迫られて母親が仕事を増やした結果ではあったが，Clには扱えない変化

であったと言えよう。その自覚の後は，母親と共に過ごすことにClは苦痛も不快も感じなくなり，同時に母親を，以前とは違う本当の意味で，助けたいとの思いが大きくなる。これらの葛藤を整理するとその次の回では，両親の離婚の理由を知らされていないことへの，了解のできなさを語ることとなった。その課題は直接解決されることがなくても，母親が父親宅への訪問を薦めてくれることで，その了解のできなさは解かれることとなったと考えられた。

Clは離別した父親に会い「いつでも」という保証を得たところで，面接を終結とし再登校も安定したものにしている。離別の理由を説明しない母親への不信を強め，しかし関係が壊れることを恐れそれを問うこともできず，同時に生活を維持するための母親の苦労が理解できる中で，不自由さが増したと考えられた。それは，アルバイト先の交通費の不払いでも，医師の誤診でも見られた，「聞くと相手が困るから」というClのもつ様式に基づくものだと考えられた。また＃６のClの沈黙に割り込んだ時の「もう少しで言えたと思う」との思いは，母親や父親などとの関係の中で経験された思いと同一のものだと思われた。また，弟との関係も，一方的な心配の対象であったり，母親のような意識をもったりしながら，第３期には逆に弟に助けてもらう立場を経験するなど，相互の現実的な関係となっている。

３　理解と行動の様式

初めClには，物事を極端に捉える強迫的な傾向が見られた。アルバイトが入っていない夕方に自分の記憶違いでないかと落ち着かなくなることも，すべきことを書き出して部屋に予定表を貼ることも，始めると途中で作業を中断できないこともその例である。趣味が順調に進行するか心配し，それが終われば満足を感じる間もなく次の課題を意識する。そしてカレーは煮過ぎる。

それでも，繰り返し安堵を経験すると，第２期には，終われば心配するほどでないという実感を強め，#13の頃には多忙や心配そのものも楽しめるようになり，今まで自身を拘束していたスケジュールや予定表が，むしろ自分を楽にするものであることを自覚する。そして「のんびり」という気持ちを実感する。面接自体も，行くべきものから自然なものに変化する。そして第３期には部屋の掃除が滞っていても，楽な気持ちで他の事に時間を費やすことができるようになった。

物事の黒白をつけようとする態度から曖昧さを容認する態度への変化は，対人様式にも関係しているものと考えられた。Clは初め，母親と一緒に過ごすと『母親から文句を言われるか，逆に母親に離婚の理由を聞くか』という状況になりはしないかと不安になり，一緒に居ること自体を避けるという選択をしていたと思われる。それを，母親を助けて一緒にテレビを見ながら作業をする関係に変化させることができた。父親に会うか会わないかという極端な考えから，「いつでも会えるお父さん」という内的対象の形成に至ったと考えられた。

４　登校に対する態度

第１期のClは，生活は順調だと言い困っている様子を見せない。学校や登校については「わからない」と答えることが多く，漠然としているのがこの時期の特徴である。それは小野（2003）によれば休息期にあたるが，山本（2008）が報告する不登校の経過・回復過程モデルには見られない反応である。しかし，この時期にあってもThの介入により「学校の問題を一人で考えるのは嫌」との反応を示している。これは山本（2008）の指摘する時間的展望の転換期に生じる抵抗様の反応に一致するものと言えよう。つまり，Clは真に順調なのではなく，Cl自身が言うように登校の問題を「先送り」したり「棚上げ」していた時期であり，この回避に成功している時は生活が順調だと表現され，Thの刺激を受け回避に失敗したときは抵抗様の反応が生じたものだと考えられた。

この様に考えるとClは，不登校の問題について，常に『抵抗』と『受容』の問題を扱って来たと捉えることができる。第２期になるとアルバイト先の同級生の刺激を受け，登校について考えようと

これを受け容れる態度を見せる。スケジュールや予定表が自分を守る有効な手段だと分かると，登校の問題もスケジュールに載せようとするがこれも受容的態度だと言えよう。同時にこれから先の漠然とした不安を感じて再び先送りをしたくなったり，これまで棚上げしてきたことを後悔する。また，考え過ぎた結果の疲労感を呈する。この不安や後悔を背景とする抵抗様の反応が盛んに生じるようになったのもこの第２期の特徴である。つまり，再登校直前のこの時期には，『抵抗』が低減され『受容』が高まっているのではなく，『今の状態を受け容れて具体的に取り組みたいとも思っているが，同時にそれを思うと過去や未来の後悔や不安が大きくなる』という，『受容』も『抵抗』も共に顕著になる状態が現れていることが分かる。

そして第３期になり登校を果たせると，登校できることが特別なことでなかったり，良くも悪くもないと表現されるなど，むしろ受容傾向を示さなくなったと考えられた。また「学校のことをそんなに考えることもないのでは」との思いが出て来て抵抗様の反応が低減した状態に至ったと考えられた。

５　総合的な考察

本研究の目的は，不登校児童生徒の再登校に向けた内的取組について，保護者との関係と課題への直面及び再登校への行動化が可能となる時機に注目しながら，事例を基に論ずることであった。

本事例のClは，離婚した両親それぞれとの関係を再構築することで再登校に至ったと考えられた。それは気遣い，不信，攻撃の順で生じた関係に続いて，何が自分を困らせていたかという課題への直面と発見の過程であり，その後の関係の再構築に至るものであった。先行研究と同様にこの事例においても，保護者からの被援助感の獲得と課題への直面が，再登校への重要な要素であることが支持されたと言える。またその過程において，理解と行動の様式の強迫傾向が緩和されるパーソナリティの変容が，重要な要素となっていることが示された。

再登校への行動化が可能となる時機については，『受容』と『抵抗』という２側面で捉えられる可能性が示唆された。前者はClによって「スケジュールに載せる」と表現されたもので，現状を受け容れ目の前の問題に取り組もうとするもので現在に焦点を当てた態度だと言える。また後者は「不安」「後悔」と表現されたもので未来や過去に焦点を当てた態度だと言える。そしてこれらが共に扱われなかった第１期は回避が成功している時期であり，再登校を促してもその成果が見られにくい時期だと考えられた。また一見矛盾する内容と考えられる両者が共に顕著になった時が再登校を促す好機であると考えられた。

付記

面接経過等の公開に同意くださいましたClをはじめ関係者の皆様に深謝いたします。

文献

小野修（2003）：親と教師が助ける不登校児の成長　黎明書房.

佐藤修策（2005）：不登校（登校拒否）の教育・心理的理解と支援　北大路書房.

山本奨（2008）：時間的展望の変化に見る不登校の経過・回復過程－高校生事例による検討－　心理臨床学研究　26（3），290-301.

山本奨（2010）：不登校児童生徒を支援する教師の自己効力感－被援助感による検討－　日本教育心理学会第51回総会発表論文集　18.